

パーキンソン病について No.10

話題の新薬 マヴィレット配合錠

パーキンソン病の薬物治療について

アデノシン A_{2A} 受容体拮抗薬

① 作用

アデノシンという神経伝達物質は、線条体の神経細胞に対し、ドパミンとバランスを取って作用していますが、パーキンソン病では、ドパミンの作用が弱くなることにより、アデノシンの作用が強くなって神経が過剰に興奮し、運動機能が低下します。本剤は神経細胞におけるアデノシンの作用を阻害することにより運動機能を改善します

② 特徴

神経のバランスを調節し運動機能を改善します
ウェアリング・オフ現象を改善します

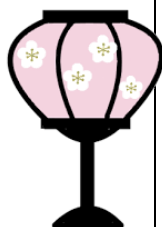
③ 薬剤名

●ノウリアスト錠 20mg (イストラデフィリン)
1日1回 1~2錠 (1日2錠まで)

④ 副作用

ジスキネジアがみられることがあります

ノルアドレナリン前駆物質



① 作用

パーキンソン病では、ドパミンだけでなく、ノルアドレナリンも減少します。そのノルアドレナリンを補充する薬です

② 特徴

すくみ足に効果を示すことがあります
立ちくらみを改善させます

③ 薬剤名

●ドプス OD 錠 100・200mg・細粒 (ドロキシドパ)
1日1~3回 (1日900mgまで)

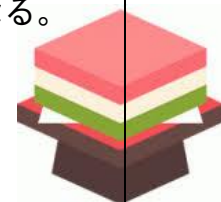
④ 副作用

目に見えないものが見えるなどの症状がみられることがあります

抗ウイルス化学療法剤

アッヴィは、抗ウイルス化学療法剤「マヴィレット配合錠」を販売した。本剤は、ジェノタイプ1または2、およびそれ以外のC型慢性肝炎およびC型代償性肝硬変に対し、1日1回経口投与で治療可能な薬剤であり、インターフェロンやリバビリンの併用は不要である。直接作用型抗ウイルス剤(DAAs)未治療のジェノタイプ1または2のC型慢性肝炎に対して、本邦初の8週投与での治療が可能となった。また、本剤はジェノタイプ1または2以外のHCV感染、代償性肝硬変など特定の治療課題を持つ患者、およびDAAsによる前治療で治癒しなかったなど治療選択肢が限られている患者に対しても、12週投与製剤として新たな治療選択肢となる。

薬価 1錠=24210.4円



副作用情報 リクシアナ錠

第一三共から販売されている血液凝固阻止剤の「リクシアナ錠」は、直近3年6か月の副作用報告であって、因果関係が否定できない副作用として、「間質性肺疾患関連症例」が8例(うち死亡1例)報告された。そのため重大な副作用の項に「間質性肺疾患」が追記された。

一人暮らし、愛犬いると健康的?

一人暮らしでイヌを飼っている人は、心臓病や動脈硬化で亡くなるリスクが大幅に減る——。こんな分析をスウェーデンの研究チームが、英科学誌「サイエンティフィック・リポート」に発表した。散歩などで飼い主が体を動かす機会が増えるほか、イヌとの絆が孤独感やストレスを癒やし、健康にいい影響を与えている可能性があるという。一人暮らしでイヌを飼っている人は、飼っていない人より心臓・血管の病気で死亡するリスクが36%低下。家族と同居している人でも15%低かった。特に、レトリバーやポインターなど、活発な狩猟犬を飼っている人ほどリスクが低い傾向があった。

